

出口治明さん連続講義

「古典を読めば、世界がわかる」

第4回 2019年1月22日



『市民政府論』

ロック

(角田安正＝訳、光文社古典新訳文庫)



<解説>

ロックはまず「人はもともと完全に自由な状態にあり、自然法の範囲内であれば自分の行動を自分で決め、自分の財産や身体を思いのままに処することができる」と述べる。人間は生まれつき、他のいかなる人間とも同じように、あるいは世界中のいかなる人間集団とも同じように、完全な自由に与る資格と、自然法の定める権利および特権を余すところなく無制限に享受する資格を有する。人間は生命・自由・財産を守り、他人からの加害、攻撃を防ぐ権力をもともと与えられているのである。そればかりではない。他人が法を犯した場合には、審判を下し、さらにはその犯罪にふさわしいとみずからが確信する罰を下す権力も与えている。国家の成立は、この人権を守るための人々の合意に基づくとして、国家の立法権力や統治形態など、国家のあり方について緻密な理論を組み立てていく。ロックは、戦争で勝利した場合にも敗者の所有物を自由にする権利や資格はないと述べるなど、当時としては、かなり思い切った発言をしている。この思想は、アメリカの独立宣言、フランス革命を支える理念となった。

ロッキ略年譜 (ゴシック部はイングランド政治史)

- 1632年 イングランド西南部サマセット州リントン村に生まれる。
- 1640年 チャールズ一世がスコットランドの叛乱を抑える必要に迫られ、戦費調達のため短期議会を、次いで長期議会を召集。
- 1642年 チャールズ一世、長期議会を相手に宣戦。内戦が始まる (~1647年)
- 1648年 ふたたび内乱勃発。
- 1649年 オリバー・クロムウェルがチャールズ一世を処刑。共和制開始 (ピューリタン革命)
- 1651年 航海法が制定され、オランダ商船のイギリス入港が禁止へ。ホップズ『リヴァイアサン』を出版。
- 1652年 第一次英蘭戦争 (~1654年)
オックスフォード大学に進学。修辞学、論理学、倫理学、幾何学、ギリシア語を学ぶ。物理学や化学の実験科学や医学にも関心を寄せる。
- 1653年 クロムウェル、終身の護国卿となり、軍事的独裁政治を行う。
- 1658年 クロムウェル死去。
- 1660年 フランスに亡命中のチャールズ二世がロンドンに入り、王政復古。
英語で「世俗権力論」を執筆。オックスフォード大学クライストチャーチ・カレッジでギリシア語講師の職に就く。
- 1663年 弟トマスを亡くし、天涯孤独の身に。
- 1665年 第二次英蘭戦争 (~1667年)
- 1667年 『宗教的寛容に関する論考 (寛容論)』を執筆。
- 1671年 『人間姿勢論』の草稿 A、そうこう B を執筆。
- 1672年 信教自由令。第三次英蘭戦争 (~1674年)
クロムウェル政権の重鎮で王政復古に功のあったシャフツベリによって聖職者任命局の主事に任命される。
- 1675年 フランス旅行へ (~1679年)
- 1677年 シャフツベリ、反王政活動のかどで逮捕される。
- 1679年 『統治論第二篇 (市民政府論)』の執筆に着手。
国民の不当逮捕を禁止する人身保護法が制定される。
ヨーク公 (チャールズの弟) 排斥法案が庶民院を通過。チャールズ二世、議会解散で対抗。
- 1680年 『統治論第一篇』の執筆を開始。
- 1681年 シャフツベリ、大逆罪で告発される。
- 1682年 シャフツベリ、オランダに亡命 (翌年客死)
- 1683年 オランダへ亡命、アムステルダムに住む (~1689年2月)
- 1684年 反国王活動のかどで、クライストチャーチ・カレッジ研究員の地位を剥奪される。
- 1685年 『人間知性論』の草稿 C の執筆が進む。
チャールズ二世死去。ヨーク公がジェームズ二世として即位。
- 1687年 ジェームズ二世、新カトリック政策を推進。

- 1688年 ジェームズ二世、亡命。名誉革命が興る。
- 1689年 帰国。オランダ総督オラニエ公ウィレムはウィリアム三世として、妃のメアリー（ジェームズ二世の娘）と共同で即位。ロックは、「権利の章典」の起草に加わる。
『寛容についての書簡』『統治論』『人間知性論』をそれぞれ匿名で出版。
- 1690年 『寛容についての第二書簡』を著す。
- 1694年 『統治論』第二版を刊行。
- 1698年 『統治論』第三版を刊行。
- 1700年 『人間知性論』第四版を刊行。
- 1704年 死去。

出口治明さんが選ぶ「あわせて読みたい」BOOK GUIDE



『社会契約論／ジュネーヴ草稿』 ルソー／中山元訳(光文社古典新訳文庫)

人は自由なものとして生まれたのに、いたるところで鎖につながれている。家族は、支配者は、人をどう縛り付けているのか。戦争に敗れたらその国の住民は自由を失うのか。奴隷制度はどうか。市民の世界において正当で確実な統治の規則というのはいくらあるのか。主権は人民にあるとして、社会と市民はどのような関係であるべきなのか。政府は消費するだけで何も生産しない。消費するものは、国家の構成員の労働から提供される。この関係性においてもすべての政府が同じ性格ではなく、取り立ての厳しい政府もあれば比較的ゆるやかな政府もある。君主制の国と自由な国でも異なるし、専制政治の国では人民を幸福にするための統治はほとんど望めない。フランスの思想家ルソーは政権のあり方から宗教との関わりなどあらゆる場面において「主権は人民にある」状態を定義する。この思想は、のちのフランス革命を導くこととなる。



『自由論』 ミル／斎藤悦則訳(光文社古典新訳文庫)

イギリスの哲学者で経済学者でもある著者は、自分の意見をもつ自由、その意見を率直に表明する自由は、人間にとって絶対に必要なものであると述べる。しかし、古代ギリシアから、自由と権威の対立は存在していた。果たして自由は、権威や権力とどう対峙すべきなのか。また、個人の自由を阻害するのはそうした権威や権力、あるいは支配者だけではない。人民自身が人民の自由を阻害することもある。多数の専制は、警戒すべき害悪のひとつだ。自由を尊重する思想や言論とはどうあるべきか、宗教が定めた安息日は、人の自由を縛るものではないのか。社会による統制、個性のあり方などについてイギリスだけでなくロシアや中国の例を引きながら論じる。



『コモン・センス 他三篇』

トーマス・ペイン／小松春雄訳(岩波文庫)

トーマス・ペインは、1737年にイングランド・ノーフォーク州で生まれ、37歳のときに当時イギリスの植民地であったアメリカに移住した。この頃イギリスは、アメリカに対し1765年に印紙条例、1767年タウンゼンド諸法など自国に有利な法律を押し付けるなどしたため、アメリカはイギリスに大きく反発したが、国民の多くは独立を志向するほどではなかった。風向きを変えたのは、ペインが書いた『厳粛な思い』(本書収録)という一文で、ペインはイギリスのインド支配やインディアン政策を厳しく批判し、いずれアメリカが独立することを予言。これが1776年に発表した『コモン・センス』に繋がっていく。当時アメリカでは独立を口にするのはタブーだったが、ペインは『コモン・センス』の中で王政と世襲制を非難し、イギリスとの関係を見直すこと力強く説得している。独立戦争で指揮を鼓舞するために書いた『アメリカの危機』も収録。



『愛国・革命・民主 日本史から世界を考える』

三谷博(筑摩書房)

歴史学者の著者は、明治維新は死者が少ないにもかかわらず、既得権益をもつ武士たちがその権利を手放した大革命だという。フランス革命と比較しても死者の数は圧倒的に少ない。しかし世界の革命についての研究で明治維新が取り上げられることはほとんどない。革命とは、君主制を打倒することだという思い込みが強く、天皇が政権の座に復帰して政治社会が再編成されたという明治維新はそこに当てはまらないのだ。著者は、ナショナリズムを「ある国家を基準にして、「我々」と「他人」を差別する心の習慣」と定義して、日本や中国、キリスト教世界やイスラム世界、インド世界におけるナショナリズムのあり方を比較分析する。

近代において、日本にとっての中国、ドイツにとってのフランス、アメリカにとってのイギリスはどういう存在であったか。それが国家の形成にどのような影響を及ぼしたのか。

著者は歴史を丹念に掘り起こすことで、日本がどうあるべきか、他国とどんな関係を築くべきかを丹念に考察している。



『社会心理学講義 〈閉ざされた社会〉と〈開かれた社会〉』 小坂井敏晶(筑摩書房)

第2回『ソクラテスの弁明』講義でも紹介した書籍。「正しい社会の形はいつになっても誰にもわからない。だからこそ現在の道徳・法・習慣を常に疑問視し、異議申立てする社会メカニズムの確保が大切」と語る著者は、本書の中でも民主主義のほころびや社会システムが同一性を保ちながら変化していくことを論理的に解説する。

今回の講義と特に関連が深いのは、第8講「自由と支配」、第10講「少数派の力」、第12講「同一性の変化の矛盾」、第13講「日本の西洋化」など。第8講では、士農工商と身分が分かれて公然と差別される社会と比べて民主主義の方がましと言えるのか、と問題を提起。自分たちは平等だと認識することで、格差に対する不満が強くなることを指摘している。また第13講では、西洋の植民地にされた経験のない日本でなぜ顕著な西洋化が現れたのかを福沢諭吉「脱亜論」など多くの文献をもとに解説。異文化を受け入れる人間の心理が社会システムの変化に繋がるメカニズムを明らかにする。

編集部便り

出口治明さん連続講義「古典を読めば、世界がわかる」にご参加いただき、誠にありがとうございます。
でございます。

編集部員による少人数の運営で、いろいろと不手際もあったかと思いますが、ぜひ今後ともよろしく願いいたします。

よろしければ、ご意見・ご感想等、以下のアドレスまでお送りいただけないでしょうか。
メールアドレス salon@gr.kobunsha.com 次回以降の参考とさせていただきます。

Facebook ページも作成しました。Facebook にて、「@salon.kobunsha」と検索して
いただくと「光文社【本がすき。】サロン」というページが出てきますので、ぜひ「いいね！」
を押してください。

また、講義の動画配信サイトも公開しております。各回の講座を、20分～30分ほどに分割してアップしております。別途登録料がかかりますが、よろしければ一度サイトにアクセスしていただければ幸いです。

<https://salon-kobunsha.jp/>

なお、最終回は、2月28日（木）19時より、同じ会場で開催いたします。
出口さんにお取り上げいただく書目は、『歎異抄』になります。
皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

2019年1月22日

光文社新書編集部
Web「本がすき。」編集部
運営スタッフ一同